

【関連年表（島津忠良）】

一四九二年 誕生

一五二六年

息子の貴久が島津家を継ぎ、第十五代当主となる。

一五二七年

出家し、日新齋じっしんさいを名乗る。

一五四五年

日新公にっしんこういろは歌を作る。

一五六八年 死去

【関連年表（新納忠元）】

一五二六年 誕生

一五三八年

島津貴久に面会し、父とともに島津氏に仕える。

一五九二年

文禄の役・慶長の役に際して、留守居役を務める。

一五九六年

二才咄格式定目を作る。

一六〇〇年

関ヶ原の戦いに際して、留守居役を務める。

一六一〇年 死去

いにしへの道を

島津忠良、新納忠元

みなさんは、「郷中教育」を知っていますか。郷中教育とは、江戸時代初期の薩摩藩で始められた、四百年の歴史を持つ青少年教育の伝統です。先輩が後輩を教え導くことで、勉強や武芸、山坂達者を学び合い、心身を鍛えました。みなさんがよく知っている西郷隆盛や大久保利通なども、この薩摩藩の郷中教育で育ったのです。

郷中教育には厳格な規律がありますが、これは、新納忠元という戦国時代の武将が定めた「二才咄格式定目」が原点であると言われています。また、その五十年前に、伊作島津家当主の島津忠良が作った「日新公いろは歌」も、郷中教育の基本を歌の形で表したものと

して、繰り返し暗唱されました。

郷中教育の原点を作った島津忠良と新納忠元とは、どのような人物だったのでしょうか。

【島津忠良（日新齋）】

【幼名】
幼少時の名前の事。主に、平安時代から江戸時代にかけて、武士や貴族の子が幼児期に付けられた名前
で、元服して諱（いみな実名）をつけるまで、この名前を使用した。

忠良は、幼名を菊三郎きくみぞうとといいます。島津家の分家である伊作家の当主であった父の善久は、菊三郎が三歳の時に亡くなってしまいました。その後、菊三郎の母である常磐とぎわは、当主となる菊三郎を厳しくしつけるため、寺に預けて育てました。

菊三郎が十歳の、ある夏の日のことです。菊三郎は、寺の学友と一緒に、城下の川で水泳や魚取りをして遊んでいましたが、夢中になっているうちに、勉強の時間になつてしまいました。

「菊三郎様、勉学の時間ですよ。寺にお戻りください。和尚様おしょうが待っていていらつしゃいます。」

【山坂達者やまざかたつしや】
山野を駆け巡り鍛錬たんれんするこ
とで、何事にもへこたれない精
神や体力を養つ。

【常磐とぎわ】
忠良の母である常磐は、当時
の大学僧の禅僧桂庵けいあんに師事して
朱子学を学び、論語（中国の思
想家孔子の教えを著した書物）
を好んだ。これらの影響は、後
の日新公いろは歌にも表れてい
る。

【年齢別の分け方】

- ・小稚児（六〜十歳）
- ・長稚児（十一〜）
- 元服前の十四、十五歳
- ・二才（元服後の十五〜二十五歳）
- ・長老（妻帯した先輩）

【長稚児たちの一日】

（早朝）先輩の家へ行って本読みを
習い、家に帰って朝食後その
復習をする。

（午前）広場や神社の境内などに集
って、馬追いや相撲、旗とり
などの山坂達者によって身体
を鍛える。

（午後）読み書きの復習をした後、
先輩や先生の家に行き、夕方
まで、剣、槍、弓、馬術など、
武芸の稽古をする。

（夕方）二才たちが集まっている家
に行って、郷中の掟を復唱
したり、自分たちの生活を反
省する。

寺から使いの者が二度やってきましたが、水遊びに心を奪われている菊三郎の耳には入りません。とうとう和尚は怒り、自ら菊三郎を川から連れ戻すと、書院の柱に縛り付けました。

「いやじゃあ！ 他の者は遊んでおるのに！」

まだ幼い菊三郎は、大声で泣き叫びました。すると和尚も目に涙を浮かべながら、大きな声で、

「伊作家の主であることをお忘れになられましたか。伊作家が栄えるか廃れるかは、あなたの努力によって決まるのでございますぞ。」
と厳しく説いたのです。

菊三郎の泣き声は、離れて住んでいる常磐の所まで聞こえました。なぜ菊三郎が泣いているのかを使いの者から聞いた常磐は、「良き師を得たものだ。」と喜んだとい

【書院の柱】

菊三郎が預けられていた、海蔵院の柱。

現在この寺は焼失し、後に建築された柱の一本が、「日新柱」として日置市立伊作小学校に保存されている。

【宗家】
その家系の当主。本家。

【中興】
一度衰えていたり途絶えたものを、復興させること。

【忠良、日新齋を名乗る】
息子貴久が宗家の当主に就いた後、忠良は三十六歳で剃髪、「愚谷軒日新齋」と号し、貴久の補佐を務めた。なお、日新公は尊称である。

このような厳しい教育を受けて育った忠良は、その後の成長とともに立派に学問を修め、その徳はやがて領外に高まりました。そして、ついには島津宗家から領内の政治を委任され、「島津中興の祖」と呼ばれるようになっていきます。

その後、息子の貴久が島津宗家の当主の座に就くと、忠良は三十六歳で出家して日新齋を名乗り、領内の青少年を集めて学問や武道を教えました。そして、教育を何より大切にされた忠良は、その教えを「日新公いろは歌」にまとめたのです。

いにしへの道を聞きても唱へても

わが行にせずばかひなし

これは、日新公いろは歌の最初の一首で、「昔の賢者の立派な教えや学問も、口に唱えるだけでは、役に立たない。実践、実行することがもつとも大事である。」と

【いろは歌の石碑】

鹿兒島市の維新ふるさと館近くの「歴史ロード」(維新ふるさと道)や、南さつま市の「いにしへの道」には、いろは歌の石碑がある。

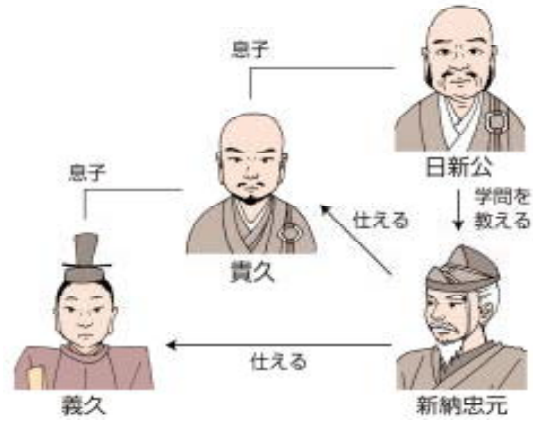
【歴史ロード】



【いにしへの道】



【人物関係図】



【考えてみよう】

日新公の「いにしへの…」の歌と、論語の「学びて思わざればすなわちくらし」を比べてみよう。似ているところ、違うところはどこだろうか。また、それぞれのどのような思いが込められているのだろうか。

いう意味です。学問と共に、実際の行動を大切にしていた忠良の思いが伝わってくる、とても有名な歌です。

【忠良と忠元】

日新公が教える子どもたちの中に、十三歳の新納忠元の姿もありました。何事にも熱心に取り組む忠元を、日新公は大変かわいがっていました。

ある日のこと、日新公が普段手ふだんにしている数珠じゆずを差し出して、子どもたちに聞きました。

「こん数珠の玉の数を知っている者があるか。」

ところが、誰も答えません。かねてから問答によく答える忠元も黙だまっているので、日新公は尋たずねました。

「おぬしは、知っておるじやろう。」

「はい。私は、殿様とのの数珠の玉は、かねてから数えておりますので、よく知っています。」

日新公は、数珠の玉の数も承知している忠元の観察眼

【調べてみよう】

日新公の「いるは歌」は「いは」の「い」から始まって、最後の「す」まで、全四十七首ある。どんな歌があるか調べてみよう。



【忠良の墓】



(南さつま市)

【島津義久】

島津家第十六代当主。

優秀な弟達を適材適所に配置して、三州統一を成し、九州をほぼ平定した名将である。

祖父・忠良より「三州の総大将たるの材徳自ら備はり。」すなわち、当主としての人徳が元から備わっていたと評された人物。

と、その知識を自慢しない謙虚けんきよさに感心し、ほうびに短刀を与えようとしたが、忠元は、「手柄てがらを立てたときに、いただきとうございます。」と答えたといいます。

日新公の教えにより、数多くの優秀な武将が育ちましたが、その中でも忠元は、文武両道の武者として、島津軍でも一番の武将と言われるほどの力をつけていきました。

【新納忠元】

少年時代を日新公のもとで過ごした新納忠元は、成長してその武勲ぶくんを認められ、大口の地頭を任せられます。

やがて月日が経ち、島津家は日新公の孫にあたる義久が当主となります。この時、既に日新公はこの世を去っていました。義久率いる島津軍は、忠元らの活躍かつやくもあり、九州統一にあと一歩のところまで迫せまっていました。

【忠良を祀まつった竹田神社】



(南さつま市)

【大口の地頭】

鎌倉時代の地頭とは異なり、当時は領主のことを地頭と呼んだ。

大口は現在の伊佐市大口。当時は別の名で呼ばれていたが、忠元が地頭についた頃から「大口」と呼ばれるようになった。



【秀吉の陣】

この時には、秀吉は現在の薩摩川内市まで侵攻しており、泰平寺で義久と会見した。

しかし、この時、その九州に、二十万を越える大軍が乗りこんできます。天下統一を目指す豊臣秀吉が、島津征伐にやってきたのです。義久は、この秀吉の九州上陸により撤退し、ついには人質を出して和を乞うことを決意します。

ところが、この時、六十二歳の忠元は、一人、城にこもって防戦の準備を進めていました。

「一戦も交えないで秀吉の軍門に下るなど、断じて忍びがたい。秀吉軍は、遠征で食料に乏しく、疲労困憊しておるではないか。大軍と言えど、打ち勝つ策はある！」

しかし、その忠元のもとへ、主君である島津義久から、「私が和睦した秀吉と戦うのならば、それは私の敵であるということだ。」

との言葉が伝えられます。忠義を尽くしてきた殿様から敵とみなされるのは、忠元の本意ではありません。ここ

【島津歳久】

この時、和睦に反対した武将はもう一人いる。宮之城の島津歳久である。

歳久の家来は、秀吉の御輿が宮之城を通る際に弓矢を射かけているが、予め襲撃に備えた秀吉のかごは空かごにしていた為、秀吉は難を逃れた。

【原文】

「一戦も相防ぐ者これなきは、男子なきも同然故、我は京勢が糧絶えて打ち勝つ事胸中これあり候」

【原文】

「弓箭を致すにおいては、すなわち御敵たるべし」

【秀吉の陣】

現在の伊佐市の南に位置する天堂ヶ尾。帰途にあつた秀吉だが、川内川が洪水により渡れず、川の南に位置する天堂ヶ尾で野営をしていた。付近一帯は高台になっている。

【天堂ヶ尾より伊佐平野を望む】



【天堂ヶ尾関白陣跡】



に至り、忠元も降伏を決意し、秀吉の陣に向かいました。

頭を下げひれ伏す忠元に、秀吉が問いかけます。

「武蔵（忠元のこと）よ、まだ私と戦うつもりか。」

忠元は平伏したままかしまり、

「主君である義久が戦うなら何度でも戦いましょう。しかしながら、このように和睦をいたしました上は、義久は絶対に裏切ることはいけません。」
と答えました。

これを聞いた秀吉はその心構えに大変感心し、忠元の顔を見てみたいと思いました。そこで、忠元にその場で刀を与えます。しかし、忠元は平伏したまま受け取り、顔を上げません。秀吉は何とか忠元の顔を見たいと思い、さらに羽織も与えたのですが、これも平伏したまま受け取り、やはり顔を上げません。

【原文】

「主人義久さへ思立ち候はば、幾度も敵対つかまつるべし、しかしながら、かくの如く御和睦仕りたる上は、義久も表裏つかまりまじ」



その時、ひれ伏す忠元の横顔の立派な口ひげを見た、秀吉側近の細川幽斎が、即興で「口のあたりに鈴虫ぞなく」と、和歌の下の句を詠みました。すると忠元は、笑いながら初めて顔を上げ「うわひげをちんちろりんとひねりあげ」と上の句をつけて返し、居並ぶ諸将を感心させるとともに、張り詰めた空気を和ませ、秀吉をたいそう喜ばせたといっています。

この後、秀吉は天下統一を成し遂げ、さらに朝鮮にまで兵を出します。文禄・慶長の役です。島津氏にも出征の命令が出されますが、忠元は高齢のため、日本に残ることを許されました。

しかし、思わぬ問題が発生します。朝鮮出兵により領内の年長者が減ったことで、若者たちは規律を失い、郷土の風紀が乱れていったのです。これに悩んだ忠元は、

【細川幽斎】

豊臣秀吉や徳川家康に仕えて重用された、武芸百般に通じる武人であるとともに、藤原定家の歌道を受け継ぎ近世歌学を大成させた、当代一流の文化人でもある。

なお、このとき歌いかけたのは秀吉本人とも言われている。

【和歌について】

続けると「うわひげをちんちろりんとひねりあげ口のあたりに鈴虫ぞなく」となる。これは、連歌という文芸の一つで、和歌の上の句(五・七・五)と下の句(七・七)を、交互に作り楽しむもの。

なお、通常は上の句から詠むが、ここでは逆になっている。

【文禄・慶長の役】

一五九二年(文禄元年)〜一五九八年(慶長三年)。日本の豊臣秀吉が主導する遠征軍と、明及び李氏朝鮮の軍との間で、朝鮮半島を戦場に行われた戦争。

【忠元が祀られている忠元神社】



(伊佐市)

【考えてみよう】

島津忠良や新納忠元は、「日新公いろは歌」や「二才咄格式定目」を通じて、若者に何を学んで欲しいかのだろう。

一五九六年（文禄五年）、七十四歳にして、領内の青少年教育の基本規則として、「にせばなしかくしきじょうもく二才咄格式定目」を制定したのです。

一 **第一は虚言など申さざる儀士道の本意に候条、専らその旨を相守るべき事。**

これは、二才咄格式定目の一節で、「嘘偽りなきことが、武士の本道である。これについては心を込めて守りたいものだ。」という意味です。幼い頃から忠良に忠節を尽くし、正義を愛した忠元らしい一文です。

島津忠良と新納忠元。ふるさとの青少年の教育に心をくだいた二人。この二人の精神は、それから約三百年後に活躍する明治の志士たちにも大きな影響を与えました。そして様々に形を変えながら、現在の鹿児島県の教育へと受け継がれているのです。

【二才咄格式定目】
(全九箇条・抜粋)

一 第一武道を嗜むべき事。
(まず、武道をたしなむこと。)
一 兼ねて士の格式油断なく穿儀致すべき事。
(武士はどうあるべきか、常に考えていなさい。)

二才：十五歳～二五歳の青年。

咄：若者達が話し合う集いを咄相中という。その頭文字。

格式：生活上のしきたりや礼儀作法のこと。

定目：定められた規則。

【調べてみよう】

他にも、「出水兵児修養掟」などが鹿児島には伝えられている。誰が作ったもので、どのような内容なのか、調べてみよう。

